

ニーチェの病、ニーチェの哲学

札幌医科大学名誉教授 今井 道夫

二〇一〇年春に、二十余年間勤めた札幌医科大学を退職した。この間、教育上ならびに職務上の必要から、かなりの力を生命倫理学に費やしてきた。今後もそれにかかわってゆくにしても、かねてより関心のあった医学哲学にむしろ力を傾けたいと考えている。医学哲学の研究は日本の生命倫理学の進展にも寄与するのではないだろうか。すでにヴァイツゼッカーの『ゲシュタルトライス』のような体系的著作もある。ただ、私にはそうした著作について、批評するだけの十分な基盤がない。そうした基盤を固めるために、我々哲学研究者が通常おこなっている哲学思想史的研究を、医学ないし医学史と関連させみるのも一つの道ではないか。以下はそのような試みであり、取り上げるのはニーチェである。

1 一八八八年のニーチェとその著作

一八八九年一月三日、四十四歳のニーチェは、滞在していたイタリアのトリノのカルロ・アルベルト広場で昏倒し、精神の異常は明白になった。バーゼルにいたかつての同僚らの配慮で一月一〇日にはバーゼルの病院に入院させられ、一週間後には、母に伴なわれ、故郷に近いイェーナの病院に移送された。そこに一八九〇年春まで入院したあと、故郷ナウムブルクに戻り、母、後には妹エリザベートの世話のもとで暮らした。九七年の母の死後、エリザベートの方針によりワイマールに移住し、一九〇〇年八月二五日に死去した。哲学者としてのニーチェの活動はそれゆえ、一八八八年をもって終りを告げたといつてよい。この年の末には精神の異常の徴候が顕著になってくるとはいえ、この哲学者ニーチェの最後の年は、多産な一年であった。最後の輝きを放っていた。著作としては、『偶像の黄昏』、『アンチクリスト』、『この人を見よ』の三つが特記される。

ニーチェの到達点を問題にするには、『偶像の黄昏』よりも『アンチクリスト』のほうが適切かもしれない。三著のうち、『偶像の黄昏』は一八八八年中に印刷され、翌年初めに販売開始された。しかし、『アンチクリスト』は一八九五年、『この人を見よ』は一九〇八年になってはじめて出版された。『偶像の黄昏』において、キリスト教批判が底流にあり、そして「反自然としての道徳」の節は、もっぱらそれにあてられている。しかしキリスト教批判という点では、「キリスト教呪詛」と副題された『アンチクリスト』において、より全面的、徹底的になされている。『偶像の黄昏』のほうはどちらかというと散文的であり、近代人批判や当代ドイツ批判など、多岐にわたっている。とはいえ特色として、ソクラテスらのギリシャ哲学への批判がある。ニーチェのソクラテス批判は『悲劇の誕生』以来のものではあるけれども、そこにおのずと展開がみられる。

2 ニーチェの著作における病にかかわる言葉

ニーチェの以前の著作からすでにみられるところであるが、『偶像の黄昏』や『アンチクリスト』においては、病にかかわる言葉で満ちている。そしてそれらのほとんどはメタファー（隠喩）として用いられている。ニーチェの哲学の根本にキリスト教批判がある。それは『アンチクリスト』において集約的に語られている。キリスト教は生を否定する。弱者の宗教であり、賤民（チャンダーラ）のための宗教である。弱さをよしとし、道徳をふりまわす。要するに病んでいるのである。そのためキリスト教批判の言辞に病のメタファーが頻出する。また病との関連で医療の話も出てくる。

なおここで注意しておかななくてはならないのは、ニーチェは、キリスト教とともにソクラテス以来のギリシャの哲学的伝統も批判していることである。ソクラテスはデカダンの（退廃の）哲学者である、本来のギリシャの伝統の破壊者であると『偶像の黄昏』のなかでいっている。ソクラテスも病んでいるのであり、そのことはソクラテス自身、自覚していたとまでニーチェはいっている。（ニーチェによると、ソクラテスは人生を病として捉えていた。すでに『悦ばしき智恵』でいわれていたが、『偶像の黄昏』では、次のようにいっている。「ソクラテスでさえ死んだときには次のように言ったものです。『生きること—これは長患いをするようなものである。私は医神アスクレピオスに鶏一羽の借りがある。』」）

3 病む人ニーチェ—『この人を見よ』—

『この人を見よ』においても病にかかわる言葉がしばしば登場する。しかし、この著作が自伝的な性格のものであるため、違った様相もみせている。すなわち「私の病」、「私の健康」が話題にされることになる。キリスト教は病んでいる、ソクラテス以降のギリシャ哲学は病んでいるとニーチェは告発した。他方、ニーチェは生涯、病に苦しんでいた（トリノで昏倒するまで病と闘い続け、トリノでの昏倒をもって闘いはひとまず終わったといってもよい）。そのことに、自伝的著作の『この人を見よ』ではおのずと言及することになる。その言及のなかにニーチェの二つの主張を読み取ることができる。すなわち、(a)確かに私は病に苦しんできたが、根は健康である、(b)私の病は私をより高い境地へと引き上げた、私の哲学をつくりだした、という主張である。病に苛まれていたけれども「根は健康(im Grunde gesund)」であったのだ。加えて私の病は私を高い所に引き上げた。病苦が私の哲学に翼を与えた。そこにおける健康への意志、生への意思が私の哲学をつくりだした。

通常の意味では、ニーチェは生涯の多くを病のなかで過ごしていた。そのニーチェがキリスト教やギリシャ哲学の病を告発する。ニーチェの病は身体の病であり、キリスト教とギリシャ哲学の病は精神の病なのだということはできる。あるいは、それらが病んでいるとはあくまでメタファーの問題だということもできる。しかし、ニーチェはそうした見方にとどまることはできなかつた。遺伝によってであれ、感染や事故によってであれ、人は思いがけない病につきまといられる。ニーチェがそうだった。しかし、それがまた「自己喪失」から自分を救った。病が彼を救った。だからといって、病にとどまることをよしたわ

けではないだろう。陰に陽に、病からの治癒の努力を行っていたであろう。とはいえ、そうした身体的・医学的治療を重視する立場にはなりえない。むしろ彼は「根は健康である」ことを自覚する。その根拠に立ってのみ、健康への意志をもつ。彼は身体的健康をもちろん評価する立場にあるけれども、なにかの治療によるよりも、彼の哲学的思考の営みがもたらす快癒を、健康をこそ最も評価することになる。

実際生活からいえば、病にとりつかれた生涯といえなくはないにしても、そのなかで身体的にも強靭さを発揮することもあったであろう。活動の最後の年、一八八八年においてもそれが現れている。

4 ニーチェとハンマー—『偶像の黄昏』の副題—

『偶像の黄昏』の副題は「人はいかにしてハンマーをもって哲学するか(Wie man mit dem Hammer philosophiert)」となっている。ニーチェは破壊や転倒の哲学者であるから、なにか物騒なことを想像するかもしれない。ハンマーで偶像（キリスト教やギリシャ哲学など）を叩き壊す、などなど。ここでハンマーについて、一般的な話をしておきたい。ハンマーには実に様々な種類がある。漢字では通常、槌を用いるが、これは本来は木づちであろう。ただ、今では鉄製の方がより一般的で、それを鉄槌と呼んだりする。他方で鎚という漢字も用いられる。この百年余は、ハンマーは工業や労働者を象徴するものとなった。旧ソ連の国旗はハンマーと鎌が描かれており、それぞれ工業（労働者）と農業（農民）を象徴していた。

さて、ニーチェのこの副題がいうところのハンマーはどのようなハンマーであろうか。それはこの書『偶像の黄昏』において明示されている。それは石板に文字を刻むハンマーである。古い石板を捨てて新しい石板に文字を刻むハンマーである。同書における『ツァラトゥストラはこう語った』からの引用にもみられるとおり、このことに疑義はない。

5 ハンマーをめぐる考察

このように明確ではあるが、そのうえでしかし、ハンマーについて想像を巡らしたくなってくる。ニーチェの著作を仔細に読むと、次のようなことに気づく。ふつう石板とされるが、ニーチェは青銅板を考えていたかもしれない。またある箇所、石を砕いて石像を取り出す芸術家のハンマーについて語っている。あるいは「偶像」の黄昏との連関からいえば、偶像を叩いて中が虚ろでないかを確認するハンマーというのがしっくりこないだろうか。樽の中のワインやウィスキーの量や熟成度をみるためにハンマーで外から叩いてみる—こうしたハンマーの用い方はヨーロッパでは身近なようである。あるドイツの哲学研究者から、ニーチェのハンマーはその種のハンマーと見てよい、と教えられたことがある。

他方で、私はたまたま聴講した田代邦雄名誉教授（北大神経内科講座初代教授）の講義より、医療用ハンマーが十九世紀後半に普及しており、医療の現場で身近なものになっていたことを知った。ニーチェが

ハンマーを語ったとき、この医師のハンマーをも意識的にか無意識的にか考えはしなかったか。こういうと唐突と思われるであろう。しかし、はじめに示したように、ニーチェは異様なほどに、病にかんする言葉に、ひいては病にこだわっていた。このことの背景には次のようなことがあったと推定される。ニーチェが若い頃、梅毒に感染し、生涯それと格闘し、ついには一八八九年初頭に昏倒し、その後、梅毒性の精神疾患から回復することなく十年余を経て亡くなった。これが有力な説である。しかし、二つの理由から、あまり公然と語られることはなかった。ひとつはニーチェがこのことを秘匿し、加えてニーチェが倒れたあと、妹のエリザベートらが、このことをさらに隠し、それを示唆するかもしれない遺稿を厳重に管理し、処理していたことがある。もうひとつは、ニーチェが罹っていたかもしれない病気を詮索することへのためらいであった。

前者については、二十世紀後半になって次々と遺稿、書簡類が再発見され、刊行されることになって事情は変わってきた。後者のことはいまだに続いてはいる。ニーチェの哲学を彼の病気のせいにするような矮小化の危険は、なしとしない。とはいえ、示唆的な研究はあり、私は古内武氏の論文「ニーチェの梅毒意識」(一九七六年)から多くを教えられた。古内氏(元、北大ドイツ語教授)は遺稿類を丹念に読み解き、ニーチェが病と闘っていたこと、医師にかかるだけでなく、みずから医学書を読み、薬を買い込み、自己治療を続けていたことを明らかにしている。ニーチェが梅毒であったかどうかは今さら知りようがないけれども、ニーチェが「梅毒意識」に囚われていたことは間違いないというのが古内氏の結論である。

私はそこから、次のように推定した。そうであれば、医師の用いるハンマーもニーチェにとって身近なものではなかったか。どこかにそれが書かれていないか。この点は、古内氏もいうように、ニーチェは自身の病や治療についてはひじょうに慎重にふるむにとどまり、期待できない。それでも、『偶像の黄昏』の序言を注意深く読むなら、そこに医療用ハンマーを重ねて考えてみることはけっしてむりではない。ニーチェのいうハンマーは医療用ハンマーでもあった、あるいは医療用ハンマーとみるのがよりふさわしいかもしれないというのが私の推定である。これについての決定的証拠は示しにくいにしても、状況証拠は示したとおりである。このような見方は、「人はいかにしてハンマーをもって哲学するか」というニーチェの言葉の従来の解釈の多少の変更を迫ることになり、ひいては哲学の営みの再考を促すもののようにも思われる。

6 結語

ここでは、ニーチェの病との関連で、彼の著作でしばしば登場するハンマーが、医療用ハンマーでもありうる可能性を示した。これはニーチェの哲学の在り方に、さらには哲学一般の在り方にある示唆を与えうるであろう。それとともに、彼の健康・病気論にもふれた。これは、さらに今後、検討したいが、今日の生命倫理学で議論されながら、さほど展開のみられない健康・病気論に示唆を与えうるのではないだろうか。

◎後書

以上は、拙著「ニーチェと病—ハンマーをもって哲学する—」(北海道大学哲学学会『哲学』第四七号、二〇一一年、八九—一〇二頁)をもとにおこなった報告の要旨である。一部、修正・追加したところがあるものの、この拙著と内容的に重複していることをご了承いただきたい。

さて、報告に際して、ニーチェのいうハンマーが医療用ハンマーでありうることを述べた先行論文があるのを発見したとお伝えした。今回の報告の準備にあたって、これまで多少、参照していただけであった、Pia Daniela Volz, Nietzsche im Labyrinth seiner Krankheit — Eine medizinisch-biographische Untersuchung—, Koenigshausen & Neumann, 1990, を、通して読むことができ、そこで (S.149)、サッチャーという研究者がすでにそうした見解を発表していることを知った (David S. Thatcher, A Diagnosis of Idols. Percussions and Repercussions of a Distant Hammer, in Nietzsche-Studien 14(1985), pp.250-268)。そして、フォルツはこのサッチャーの見解を好意的に受け止めていた。今回の報告後、浅見昇吾関東支部長のご配慮により、上智大学所蔵のこの文献のコピーを入手できた。以下で、この論文にふれておきたい。

『偶像の黄昏、あるいは人はいかにしてハンマーをもって哲学するか』と題されることになる著作に、ニーチェは初め、『一心理学者の怠惰な暮らし』という題をつけようとしていたことはよく知られている。それがペーター・ガストからの示唆もあり、もっと挑発的な題に変えられていった経過をサッチャーは追

っている。ここからわかることは、この題は、考え抜かれてつけられた題ではなさそうだということである。ハンマーのメタファーはニーチェの著作において、ときどき用いられている。サッチャーはそれを三つに分類する。(1)彫刻家のハンマー、(2)鍛冶屋のハンマー、(3)立法者のハンマーである。彫刻家のハンマーは破壊と創造を同時に果たすものであり、鍛冶屋のハンマーは鍛錬するハンマーである。立法者というのはモーゼを念頭に置けばよいのであるが、あの石板に文字を刻むハンマーである。

しかし、ニーチェのハンマーとして、もう一つ別のハンマーがありはしないかとサッチャーは考える。それは診断のハンマーである。そしてサッチャーが引用するのは、やはり『偶像の黄昏』の序文である。ここでのハンマーの役割は、偶像を叩いて中が虚ろではないかを確認することにある。こうしたハンマーはたとえば鉄道列車の車輪を叩いて異常を調べるのにも用いられる。しかし、病とともに生き、ひんぱんに医師の診察を受けていたニーチェであってみれば、医療用ハンマーが、医師の用いるハンマーが念頭にあったとみるのが妥当だとサッチャーは考える。同じような道筋をたどって同じような結論にすでにニーチェ研究者が達していたことを知り、私は少しがっかりしたもの、他方で、私の説が門外漢の単なる思いつきに終るものではなかったことがわかり、嬉しく思っている。この際、日本においてもこうした医療用ハンマー説のあることが知られることを望む。

一点、補足しておきたい。サッチャーは論文のタイトルにもあるように、医療用ハンマーといってももっぱら打診器を考えている。そしてアウエンブルッガーに始まるその歴史にも言及している。他方、私の論文では、田代教授の示唆から出発したことから、医療用ハンマーを打腱器としていた。『偶像の黄昏』の序文の示唆するハンマーから医療用ハンマーを連想するとすれば、サッチャーのように打診器と特定すべきであり、私は、この点で曖昧であったことを認めなければならない。そのうえで、しかし、今後、検討しなければならないが、ニーチェの頃の医療用ハンマーはむしろ打腱器としての用途が重要になってきており、ニーチェの患っていた病からみても、むしろこちらによる診断をニーチェは受けていた可能性が強い。打診器としてのハンマーの役割はこの時期、あまり大きかったとは思えないからである。あるいは、ニーチェは医療用ハンマーが身近であったとしても、打診器か打腱器をあまり明確に区別していなかったように思われるがどうであろうか。□